

バードリサーチ ニュース

2011年5月号 Vol.8 No.5



Zosterops japonicus
Photo by Mikamo Hiroki

参加型調査

飛来の遅かった今年のツバメ

植田睦之 神山和夫

いつも季節前線ウォッチにご協力いただきありがとうございます。ヒバリ、ウグイス、ツバメに続き、現在はオオヨシキリ、カッコウやホトトギスの飛来やカルガモのヒナの情報が届いています。ご覧になった方はWebサービスあるいは以下のページよりぜひご報告ください。

<http://bird-research.jp/1/kisetsu/>

さて、この春は各地のツバメ観察者の皆さんや、マスコミから「ツバメがまだ来ない」との問い合わせを多数いただきました。季節前線ウォッチの結果からも今年のツバメの飛来の遅さが明確に示されましたので、ご報告したいと思います。

過去7年で最も遅かった？

季節前線ウォッチをスタートさせたのは2005年です。最初の2年はデータがやや少なかったのですが、この2005年と2006年のツバメの飛来のピークは4月上旬でした(図1)。その後の2010年までの調査では3月下旬あるいは中旬が飛来のピークになっていました。それに対して今年のピークは4月中旬。過去7

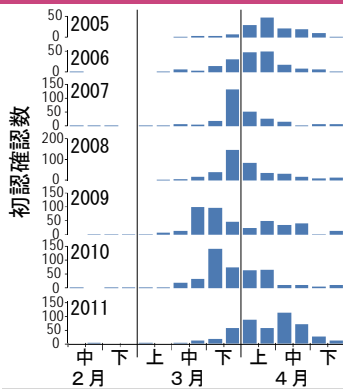


図1. ツバメの初認調査の結果。

遅かったのは寒さのせい？

東京では、この春は寒かった印象があります。では、ツバメが遅かったのは寒さのせいでしょうか？ 季節前線で集めているツバメの初認は巣の周囲に飛来した日です。気温が低いせいで、繁殖意欲(?)がわかなくなったり、虫が少なく栄養が不十分だったりして、巣に戻ってこなかったということがあります。試みに、バードリサーチの事務所のある府中市の平均気温をグラフにしてみました(図2)。確かに3月の気温はここ数年で一番低い値でした。3月にツバ

メが飛来しなかったのはこれで説明できるかもしれません。ただ、4月の気温は2010年と比べると高い値を示しています。だとすると、飛来のピークが4月中旬までずれ込んだことは、営巣地の気温

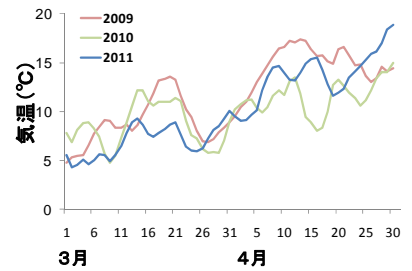


図2. 今年の東京都府中市の気温の過去2年との比較。5日間の移動平均値。

だけでは説明できないように思います。もっと広域の気象条件を見たり、食物となる昆虫の発生状況など気象条件以外の要因も考えたりしないと、この遅さは説明できそうにありません。

ヒバリとウグイスの初鳴きは？

ツバメ以外の鳥の状況はどうだったのでしょうか？ヒバリとウグイスのさえずり時期について過去2年の結果と比較してみました(図3)。ヒバリとウグイスのさえずり時期はツバメ以上に暖かい地域ほど早く鳴くという気候の影響が強いことがわかっているので、観察地点の暖かさの指数(この数値が大きいことは年間を通して温暖な場所であることを示す)と初鳴き日との関係で見ました。

すると、2008年はやや早い時期に鳴いていたようにみえるものの、どの年もほぼ同じような位置に初鳴き日がプロットされました。ツバメとは違い、今年が明らかに遅いという傾向はありませんでしたが、ウグイスについては、例年通りの結果が多い一方で、4月になってから鳴き始めたような遅い記録もある程度あり、少し遅かったのかもしれませんが。

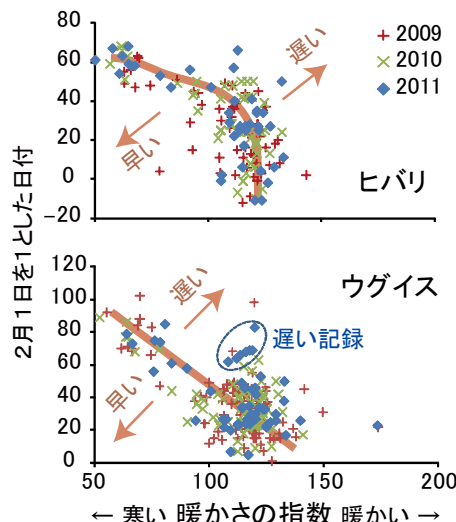


図3. ヒバリとウグイスの初鳴き日と記録地点の暖かさの指数との関係。オレンジ色の線は平均的なさえずり確認日。暖かい地域ほど初鳴きが早いことを示し、これより下に点があると平均よりも初鳴きが早いこと、上にあると遅いことを示す。

論文紹介

ノドが赤くて尾羽の白斑が大きい
オスツバメは、早く繁殖を始める

鳥には異性を引きつけるための飾り羽を持つ種がいます。ツバメでも尾羽の長さが違うなど複数の外見的特徴に雌雄差があり、これまでの海外の研究から性選択の結果、得られたものであることが分かっています。しかし、これらの特徴が日本のツバメ個体群で性選択に関わっているのかどうかまでは分かっていませんでした。

Hasegawa, M. 2010. Mating Advantage of multiple male ornaments. *Ornithol. Sci.* 9:141-148.

筑波大学の長谷川克さんは、2005年と2006年に新潟県上越市で繁殖中のツバメに標識調査を行い、ツバメのオスの羽に見られる複数の特徴が個体の優秀さを表しているかどうかを調べました。

メスが外見でオスを選んでいる場合、オスとメスに性的二型が見られるはずですが、この点については、オスの方が尾羽が長く、その尾羽にある白い斑点が大きく、そしてノドの赤みが強く、性選択の存在を裏づける結果でした。

それでは、これらの特徴は優秀なオスの目印と言えるのでしょうか。初卵日の早いツバメほど多くのヒナを巣立たせることが別の研究により明らかにされています(Møller 1994)。そこで、長谷川さんたちは初卵日を指標にして、これらの特徴を持つオスとペアになったメスが、そうでないメスよりも早い時期に産卵するかを調べました。前述のような

羽の特徴を持つオスほど多くの子孫を残せるならば、羽の特徴は何らかの優秀さに関係していると考えられるからです。調査の結果、尾羽の白斑が大きいオスと喉の赤さが濃いオスほど初卵日が早くなっていることが分かりました。この結果は、日本の個体群ではノドの赤みと尾羽の白斑が性選択の結果として発達した可能性を示唆しています。

一方、ツバメのメスが尾の長いオスを好むということはよく知られていると思いますが、これはヨーロッパの個体群で調べられたことで、北アメリカや日本の先行研究では否定的な結果が出ていて、個体群によって異なる性選択が働いている可能性があります。

ツバメ調査はバードリサーチの調査では一番参加者が多い種なので、本誌の読者には長谷川さんたちの研究に興味津々の方が少なくないと思います。日本では欧米よりツバメの研究が少ないのですが、欧米では牛舎などのコロニーで調査が行われているのに比べて、日本にはそういう場所が少なく、街中に散在するツバメの巣で調査しないといけない苦労があるようです。このような営巣場所の違いによっても、日本のツバメに独特な進化が起きているのかもしれないね。【神山和夫】



図. ツバメのつがい。(ツバメかんさつ全国ネットワークへの投稿写真)

■参考文献

Møller, A. P. 1994. Sexual Selection and the Barn Swallow. Oxford University Press, Oxford.

活動報告

シロチドリの生息状況調査

守屋年史

造成地で大きな個体群

昨年度、バードリサーチニュース2010年6月号において、募集したシロチドリの生息状況について、19名33地点の情報を送っていただきました。繁殖地の詳細な場所を含む記録もあるため、県別にシロチドリの繁殖が最近あったかどうかを図1に示しました。

報告のあった18県のうち、最近の繁殖記録が10県あり、報告数が増えれば、繁殖している県はまだ増えそうです。繁殖環境としては、埋立地などの造成地、砂浜、河川敷から報告があり、砂礫

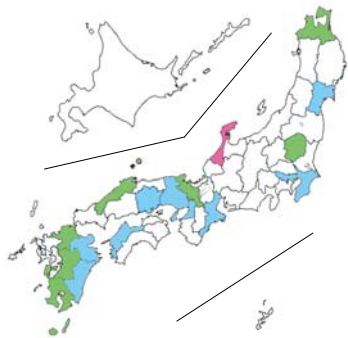


図1. 県別のシロチドリの繁殖状況。青は繁殖している。緑は繁殖期に生息。赤は過去に繁殖していた。白色は状況が不明。

のある環境が選ばれています。観察された個体数は、幅がありますが2~300羽でした。造成地などで大きな個体群が観察される傾向があり、砂浜や河川敷では多くても20羽ほどの個体群でした。造成地に繁殖に好適な砂礫の多い環境が広い面積であることや、人の立入が少ないことなどが規模の大きい繁殖地となった理由と考えられます。

全33地点のうち過去に繁殖していた場所が、7地点あり、土地利用の変化、植生の繁茂などにより、消失しています。砂礫地などの攪乱の多い環境を繁殖地として選択する生態のため、造成地等の人為的環境に依存するも、その人為環境も工場などに変化してしまうことや、自然環境では河川整備などで、河川敷の攪乱が少なくなっていることなどが、繁殖地の減少や個体数の減少に繋がっているのかも知れません。

シロチドリを見かけたら教えてください

情報量がまだまだ少なく、全ぼうを把握するにはいたっていません。もし、砂浜や河原などでシロチドリを観察した記録がありましたら、以下の情報の送信フォームから、ご報告いただければ幸いです。

■シロチドリ生息調査

<http://www.bird-research.jp/1/shirochi/>

活動報告

秩父ライブの聞き取りの結果から さえずり頻度の季節的/時刻的な変化

植田陸之・黒沢令子(バードリサーチ)
齋藤馨(東京大学)

ニュースレターの3月号でご紹介しましたが、現在、東京大学秩父演習林からライブ配信している「ブナ・イヌブナ天然林内の音」を聞き取ることで鳥の鳴き声活動の季節的・日周期的な変化の調査を行なっています。iTunesをインストールしたコンピュータで聞くことができます。ライブ中継は00:00-00:20, 02:00-02:20, 3:30-7:30, 11:30-13:00, 16:00-16:20, 22:00-22:20の6回です。日の出前後にはアカハラの大合唱を聞くことができます。家にいながらにして山の雰囲気を楽しむことができますので、ぜひ聞いてみてください。詳しい聞き方は、文末の囲み記事をご覧ください。

さて、3月1日以来、ほぼ毎朝早朝の鳥の音声活動状況の記録をとってきました。その結果から見えてきたことについてお話ししたいと思います。

記録頻度の季節変化

さえずりが最も盛んなのは日の出後30分間位なので、1分あたりに記録される種数の季節変化をこの時間についてみると、季節の進行に伴って、特に3月末から急速に記録種数が多くなったのがわかりました(図1)。カラ類やゴジュウカラなどのさえずりが活発になったのがその理由で、そこにアカハラなどの漂鳥が加わることでさらに増加しています。おそらく5月にはいると夏鳥のコルリやムシクイ類などが加わりもっと種数が多くなると思います。

冬でも暖かい日にはカラ類のさえずりが聞かれます。今年3月が寒かったので、3月末からの記録率の上昇が気温と関係しているのではないかと考え、気温変化のグラフも並べてみました。気温の低い日に記録頻度が低くなっていた例もありましたが、気温と記録頻度のあいだにはあまり明確な関係は認められませんでした。これまでに行なわれた室内実験などから、繁殖活動や渡りには日照時間が強い影響を及ぼすことが知られています。やはり野外でのさえずり活性も日照時間が強い影響を及ぼし、気温はあまり重要ではないのかもしれませんが、日による頻度のばらつきには、おそらく降雨、強風などととも効いていると

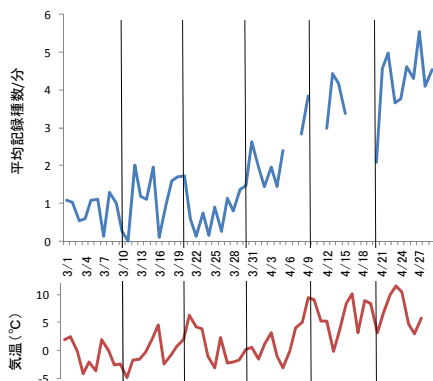


図1. 東京大学秩父演習林ブナ林での早朝(日の出から30分)の鳥の記録頻度の季節変化。気温は秩父測候所の情報。

思いますので、今後、「どういった日に鳥はあまり鳴かなくなるのか」といった解析もしてみたいと思います。

さえずりが活発になる時間帯の季節変化

鳥は日の出前後に活発にさえずります。日の出後の時間経過によるさえずり行動の変化をみようとして、日の出からの経過時間と記録された種数との関係を示しました。さえずりが活発になった4月を上旬と下旬に分けて集計(図2)すると、4月上旬は日の出10分後付近で最も多くの種が記録されていたのに対し、4月下旬は変化のパターンこそ似ていたものの、多くの種が記録される時間帯が早まり、ちょうど日の出時刻がピークになっていました。4月下旬になって渡来した夏鳥の影響ということではなく、カラ類などの留鳥の多くも早い時間帯から記録されていました。繁殖の衝動が高まると早くから鳴きたくなるのか、それとも季節が進み、陽が高くなってくると早い時間帯から照度が高くなるのか、この理由についても今後明らかにしたいと思います。

調査に参加することができます

この調査に興味ある方の参加をお待ちしています。ブロードバンドにつながっているコンピュータをお持ちの方、そして早起きができる方ならどなたでも参加することができます。参加いただける方は植田 (mj-ueta@bird-research.jp) までご連絡ください。

聞き取り調査には大坂英樹さんにご協力いただきました。ありがとうございました。

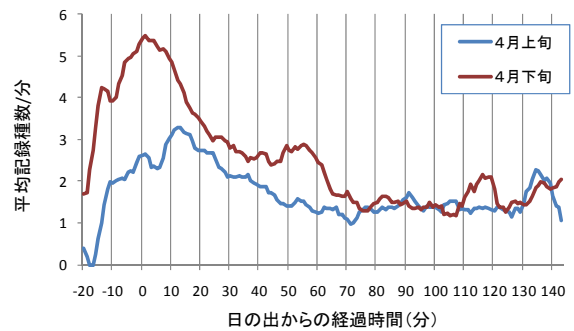


図2. 記録種数と日の出からの経過時間との関係。5分間の移動平均値で示した。

秩父ライブの聞き方

1. iTunesをインストールしてください
<http://www.apple.com/jp/itunes/download/>
2. iTunesの設定をします。
iTuneを立ち上げ、左側メニューからミュージックを選び、詳細から「オーディオストリームを開く」を選択します。そこで出てくるウィンドウに以下のアドレスを入れます。
<http://landscape.nenv.k.u-tokyo.ac.jp/tettosoundlive.m3u>
メニューに「TETTO@CyberForest」と表示されますので、それを再生すれば聞くことができます。

ジュウイチ 英:Horsfield's hawk cuckoo 学:Cuculus fugax

1. 分類と形態

分類: カッコウ目カッコウ科

ジュウイチの分類は現在、統一されていない。多くの体系ではカッコウやホトギスなどと同様、*Cuculus* 属にされているが、最新のカッコウ目の体系(Payne 2005)では *Hierococyx hyperithrus* として分類されている。この属は分子系統的には *Cuculus* 属の姉妹群にあたり、南・東南アジアに分布するオオジュウイチやハイタカジュウイチなどからなる。これらの種はジュウイチと同様に *Cuculus* 属に含まれることが多いが、英名Hawk-cuckooが示すように、カッコウ類の中でもとくに容姿がタカ類に似ており、鳴き声の特徴も *Cuculus* 属のものとは異なっている。



写真1. ジュウイチ成鳥。
[Photo by 内田 博]

全長: 320mm (305-330) 翼長: 200mm (180-210)
尾長: 141mm (135-145) 嘴峰長: 22mm (20-23)
ふ蹠長: 23mm (22-24) 体重: 99.0-147.8g
※榎本(1941)による。

羽色:

雌雄ともに背から尾にかけて、背面は全体的にチャコールグレイで、尾に白とオレンジの帯が入る。喉元は白く、胸・腹は薄いオレンジである。アイリングは鮮やかな黄色をしている。幼鳥や若鳥は背の羽根にオレンジの帯が入る。容姿は一見、ツミのオスに似ている。

鳴き声:

オスは「ジュウイチー、ジュウイチー」とけたたましい声で鳴く。オス同士のケンカなどで時おり「ジュビジュビジュビ」というような声を出すことがある。この声はメスも出す。

2. 分布と生息環境

分布:

夏鳥として九州以北の日本や韓国、中国・ロシアのアムール川流域などに渡来し、繁殖する。シベリア以北の分布域について詳しいことは分かっていない。越冬は東南アジアの熱帯・亜熱帯森林地帯とされている(Payne 2005)。

生息環境:

繁殖は本州以南では低山から亜高山帯の森林で行う。高緯度地方では平地の森林で行う。生息域は宿主の分布に大きく依存するので、宿主が好んで巣を造る沢沿いの森林で観察されることが多い。また、後述する3種の宿主の生息域は同所的もしくは側所的で、同じ水系上を標高によって住み分けていることが多く、沢沿いを移動することで効率よく托卵を行えると考えられる。

3. 生活史

繁殖システム: 越冬期 繁殖期 渡り

絶対的托卵性のシステムを持つ。自身で子育ては全く行

わず、主にオオルリ、コルリ、ルリビタキに托卵する(Higuchi 1998)。配偶システムについて詳しいことはわかっていないが、おそらくカッコウなどと同様、乱婚に近いと考えられる(Davies 2000)。

巣:

自身で巣作りは行わないが、宿主の巣は主に地上で、苔(オオルリ)や広葉樹の葉(コルリ)、針葉樹の葉や小枝(ルリビタキ)などを用い、斜面や木の根元に開いた穴の中に造られる。巣の形はどの宿主もカップ状である。

卵:

托卵鳥であるため、メスが1巣に産み落とすのは必ず1卵だが、1シーズンに1羽のメスが産む卵数は不明である。ただ、参考までにカッコウでは25卵程度と考えられている。卵サイズは他のカッコウ類と比較して格段に大きく、長径が28.1mm、短径は19.9mmであり、容積は5.67mlに達する(Higuchi 1998)。成鳥の体重がさほど変わらないカッコウの卵容積、3.39ml(Krüger & Davies 2004)とは歴然の差がある。卵色は薄い青か、青緑で、薄い茶の卵斑があるタイプもある。宿主の卵とは、ターコイズブルーのコルリ卵に多少似ているが、白地に斑点があるだけのオオルリ、ルリビタキの卵とは全く異なっている。通常、托卵鳥の卵は、宿主に寄生を見破られないために宿主の卵に色や模様が似ていることが多い(Moksnes & Røskoft 1995)のだが、ジュウイチの卵で精巧な擬態が進化していない理由はわかっていない。

抱卵・育雛期間:

抱卵期間はルリビタキが宿主の場合、約13日である。托卵鳥は、できるだけ早く孵化し、宿主の卵やヒナを巣の外に排除する必要があるため、カッコウのヒナは12日で孵化する(Davies 2000)。ジュウイチの抱卵期間も、おおよそ14日で孵化する宿主よりは短い。一方、巣内での育雛期間は同様にルリビタキに育てられた場合、約18日である。11日から14日で巣立つ宿主のヒナと比べてジュウイチの巣内での育雛期間は長い。カッコウとはさほど変わらない。オオルリ、コルリに托卵された場合についてはよくわかっていない。

渡り:

熱帯・亜熱帯アジアで越冬し、夏鳥として日本以北の繁殖地へ渡来する。本州では5月初旬に初認され、繁殖は7月半ばから宿主の繁殖状況に合わせて8月初旬まで行う。秋の渡りはおおよそ10月と考えられている。

4. 興味深い生態や行動、保護上の課題

● 成鳥

鳴き声は大きくけたたましいため、遠くはなれていてもよく聞こえるが、非常に警戒心が強く、姿を見せることはめったにない。声を頼りに近寄っていても樹冠の生い茂った木の葉の中に隠れていて、よほど運が良くない限り姿を見ることはできないだろう。そのため、その生態について詳しいことは全くと言ってよいほどわかっていない。

生態図鑑

● ヒナ

ヒナに関しても決して観察が容易なわけではない。宿主の巣は目立たないために見つけにくく、寄生率、つまり托卵された巣の割合もルリビタキでは9%弱に過ぎない。ただ、以下に示すとおり、非常に珍しい特徴を持っている。

ヒナは宿主に育てられる間、翼の裏側に羽根が生えず、口内と同色の鮮やかな黄色の皮膚がパッチ状に裸出している(写真2左)。さらに、宿主が餌を巣に運んできた際、ジュウイチのヒナは翼を持ち上げて揺らし、翼の裏のパッチを誇示するようなディスプレイを行う(写真2右)。



写真2. ジュウイチヒナとルリビタキヒナの口内(左)。給餌にやってきたルリビタキに対し、翼のパッチをディスプレイするジュウイチのヒナ(右)。

ヒナがディスプレイを行う頻度を調べてみると、より空腹なときほど確実にディスプレイを行なっていることがわかった(Tanaka & Ueda 2005)。少なくともジュウイチのヒナは翼のパッチのディスプレイを、餌を要求するための信号として用いている。一方、宿主の反応を調べるために翼のパッチを黒く塗り、見えなくさせる実験を行った。その結果、無操作の対照区Ⅰや無色の溶剤を塗った対照区Ⅱと比較し、パッチを黒く塗った処理区では、給餌回数が有意に減少した(図1: Tanaka & Ueda 2005)。これにより、翼のパッチは宿主により多くの餌を運ばせるという機能を持っていることが明らかとなった。また、宿主が翼のパッチをヒナの口と間違え、餌を与えようと試みる場面が時おり観察されている(Tanaka *et al.* 2005)。カッコウなどと同様、ジュウイチのヒナも孵化後しばらくすると宿主の卵やヒナを背中に乗せ、巣の外に落としてしまうため、巣内にいるのは常にジュウイチのヒナ1羽である。そのため、ディスプレイされた翼のパッチに餌を与えようとする

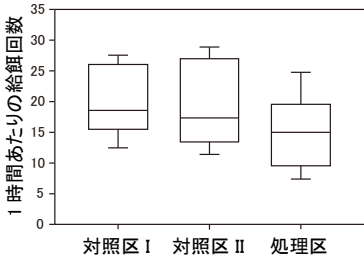


図1. パッチを黒く塗った処理区でのみ、給餌回数が有意に減少した。Tanaka & Ueda(2005)より改変。

● 宿主にあたる色の信号

翼のパッチや、ヒナの口内の皮膚は鮮やかな黄色だが、鳥には人間に見えていない紫外線も見えているため、人間に見えている色を基準に判断することはできない。分光

光度計を用いて鳥の可視範囲である300~700 nmの反射スペクトルを測定し、さらに、鳥の網膜にある色覚受容細胞(錐体)の感受性を元に、宿主に見えている色を再現し、ルリビタキのヒナの口内色と比較した。その結果ジュウイチの口内と翼のパッチは黄色の他に紫外線も強く反射しており、鳥の目から見ても全く同じ色

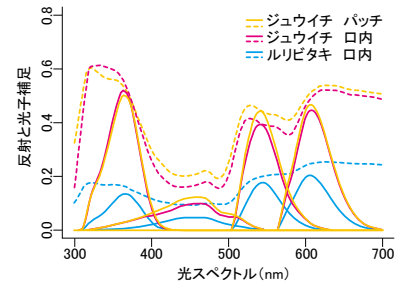


図2. 反射されたスペクトル(点線)のうち、宿主の錐体が感受できる部分を光子補正(実線)とした。知覚される色の構成要素となる。ジュウイチの色のスペクトルは、とくに紫外線領域(400nm以下)でルリビタキヒナの口内色よりも、反射率が高い。

をしていたが、ルリビタキのヒナの口内の紫外線反射はジュウイチに比べるとずっと弱かった(図2)。口内色は鳥のヒナにとっては重要な餌請い信号である。ジュウイチのほうがずっと体も大きく、餌を沢山必要としていることを考えれば、強い紫外線反射は宿主により多くの餌を運ばせるための“超正常刺激(自然に見られる刺激よりも効果の高い刺激のパターン: 山岸他 2004)”であると考えられる(田中 印刷中, Tanaka *et al.* in press)。

5. 引用・参考文献

Davies, N.B. 2000. Cuckoos, Cowbirds and other Cheats. T&AD Poyser, London
 榎本佳樹. 1941. 日本産鳥類の体の大きさ. 日本野鳥の会大阪支部, 大阪.
 Higuchi, H. 1998. Host use and egg color of Japanese cuckoos. In Parasitic Birds and Their Hosts: Studies in Coevolution (eds. Rothstein, S. I. & Robinson, S. K.), pp 80-93, Oxford University Press, Oxford
 Moksnes, A. & Røskaft, E. 1995. Egg-morphs and host preference in the common cuckoo (*Cuculus canorus*): an analysis of cuckoo and host eggs from European museum collections. *J. Zool.* 236: 625-648
 Payne, R.B. 2005. The Cuckoos. Oxford University Press, Oxford
 Tanaka, K.D. & Ueda, K. 2005. Horsfield's hawk-cuckoo nestlings simulate multiple gapes for begging. *Science* 308:653
 Tanaka, K.D., Morimoto, G. & Ueda, K. 2005. Yellow wing-patch of a nestling Horsfield's hawk cuckoo *Cuculus fugax* induces miscognition by hosts: mimicking a gape? *J. Avian Biol.* 36: 97-101
 Tanaka, K. D., Morimoto, G., Stevens, M. & Ueda, K. in press. Rethinking visual supernormal stimuli in cuckoos: visual modeling of host and parasite signals. *Behav. Ecol.*
 田中 啓太. 印刷中. 色を操る悪魔の子, 托卵鳥ジュウイチの雛—鳥類における色を用いたコミュニケーションと、寄生者による搾取—, In「種生物学研究第36号 生き物の眼をとおして覗く世界(牧野 崇司・安本 暁子責任編集)」, 第4章, 文一総合出版. 東京.
 山岸哲・森岡弘之・樋口広芳. 2004. 鳥類学辞典. 昭和堂. 京都.

執筆者

田中啓太 立教大学理学部



動物行動や生物の進化に関心があり、研究を行っています。中でも最近「鳥から見た色」が大きなテーマとなっています。カッコウやジュウイチだけでなく、他の鳥や鳥以外の生物を対象に研究を続けていければと考えています。

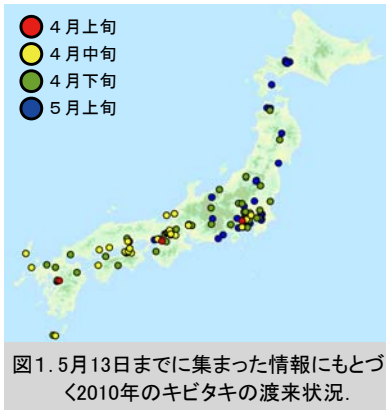
参加型調査

キビタキの初認調査 ～ 去年よりも遅い出足 ～

高木憲太郎

キビタキ調査へのご参加ありがとうございます。途中集計ですが、5月13日までに93名の方にご協力いただき、119件の情報が集まりました。そのうち繁殖地の初認情報が44件あり、最も早いものは愛媛、香川、岐阜の4月17日でした。昨年は熊本の4月8日が最初でしたので、それに比べると9日遅い渡来です(今年の熊本の最初の記録は4月18日でした)。

今年の渡来の状況を昨年と比較してみました。昨年は4月上旬に九州で初認された後、4月中旬には中四国から近畿、中部、関東で、4月下旬には関東の各地と東北で初認され、5月になると北海道で初認されました(図1)。一方、今年、4月上旬の渡来は確認されませんでした。4月中旬には昨年と同様に中四国から近畿、中部、関東で初認されましたが、昨年よりこの時期の初認は少なく、この地域の本格的な渡来は4月



下旬でした。東北や関東の初認の時期は、4月下旬から5月上旬にかけてで、昨年とほぼ同じでした(図2)。今年のキビタキの渡来は出足が鈍く、関東以西では例年より遅かったようですが、後半は遅れを取り戻したようです。今年の春は越冬地の東南アジアの天気が悪かったり、気温が低くて、渡り始めるのが少し遅くなった、ということなのでしょう。東南アジアの天候や気温が公表されたら、比較してみたいと思います。

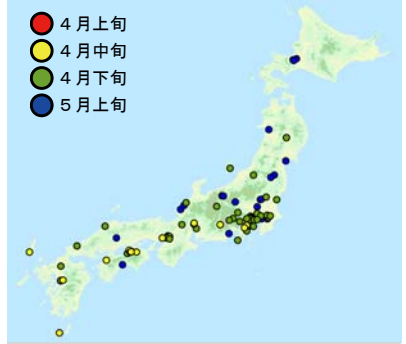


図2. 5月13日までに集まった情報にもとづく2011年のキビタキの渡来状況。

調査にご協力ください!

九州、中国、近畿、東北の情報が手薄です。まだお送りになっていないキビタキの初認情報をお持ちの方がいましたら、ぜひ、お送りください。調査へのご協力をお願いします。初認情報の送信は下記の速報ページの画面中段にある黄色の「キビタキの記録を送る」ボタンをクリックして、送信フォームからお願いします。

■キビタキ調査 2011年の初認の状況

http://www.bird-research.jp/1_katsudo/kibitaki/11.html

研究誌 Bird Researchより

● 今月の新着論文

昨年の子雀ウォッチの結果をまとめた論文が受理となりました。

三上修・植田睦之・森本元・笠原里恵・松井晋・上田恵介.
2011. 都市環境に見られるスズメの巣立ち後ヒナ数の少なさ
～一般参加型調査 子雀ウォッチの解析より～.
Bird Research 7: A1-A12.

スズメが減少していると言われていますが、なぜ減少しているのかは、まだよくわかっていません。それを明らかにし

ようと昨年スタートした子雀ウォッチのデータを解析したのがこの論文です。すでにご報告したように、親が連れているヒナ数は商業地では少なく、農村では多く、住宅地はその中間だと言うことがわかり、都市化と関連している何らかの要因がスズメの減少の原因になっている可能性が示されました。またデータが少ないのでまだ断言はできませんが、農地が多すぎるのは良くなく、中程度に農地があるのが最も良い環境であることを示唆する結果が得られました。このあたりをつきつめていくためには、また、年による変動を明らかにするためには、さらに多くの情報収集が必要です。今年も子雀ウォッチを継続します。ぜひ引き続きの、また新たな協力をお願いいたします。【植田睦之】

バードリサーチニュース 2011年5月号 Vol.8 No.5

2011年5月27日発行

発行元: 特定非営利活動法人 バードリサーチ
〒183-0034 東京都府中市住吉町1-29-9
TEL & FAX 042-401-8661
E-mail: br@bird-research.jp

URL: <http://www.bird-research.jp>

発行者: 植田睦之

編集者: 守屋年史

表紙の写真: メジロ